

就任時の学会を振り返って

(’80年5月～’84年6月 学会大会10回～13回)

第2代理事長 浅田 隆夫

1 研究活動・運営について

(1) この期(’80～’84年)のねらい

思えば、私は、懇談会・研究会時代(7年—’64年～’71年)の基盤づくりはほぼ完了し、当初からほぼ20年を経たこの期に、計らずも理事長を仰せつかったのであった。

私が、まず考えたことは、①この20年を回顧し会員の研究を跡づけること ②研究領域を改にし、専門分野ごとの研究を推進すること ③会員の力を結集して、①②の内容を精査・検討し、継続的な共同作業(「連続シンポジウム」などを含む)を通してこれらの内容を「一本」にし、会員の研究資料に資すること ④このために理事会の業務を活性化し、会員の研究動向を把握すること ⑤「日本学術会議」の登録認可を受けること……などであった。

幸い、’81年3月5日「日本学術会議」の登録認可があり、これによって機関誌の郵送、学術会議会員の推薦などに便宜が与えられることになった。

また、’81年11月には、筑波大学において学会初めての試みとして研究合宿を実施(1泊2日)し、以後、会員の、会員による月例研究会を計画・実施。2ヶ月後の月刊誌「レクリエーション」には、これらの内容を詳述・掲載し、関心のある読者の便に供するよう企図した。

(2) 連続シンポジウムの試み

’82年から’86年にかけて「rec. 学の体系化に関する研究」と題して、rec. 学の研究分野を6つの領域に分け、隔月一領域ごとに数名のスピーカーとコーディネーターを配して「連続シンポ」を実施、また、これを補うために学会大会時にもいずれかの分野をテーマに「シンポ」を行い内容の深化を計った。

私が、この連続シンポを試みたのは、さきにも触れたように、これによって学会の研究が一層高まり、また、過去20ヶ年の研究内容が分野ごとに跡づけられて整理され、しかも、これを学会の事業として会員の有志がとり組めば、きっと rec. 学なるものの対象と方法がより一層鮮明になると考えたからであった。したがって、私は、この連続シンポには最後まで欠かさず出席し内容の検討を計った。この成果は、会員の協力によって『rec. 学の方法』として’87年4月世に問うことになった。

(3) 会員に対する調査

これよりさき、’81年度には「会員の動向と学会に対する要望」といったアンケート調査を実施(年齢・職業・研究分野・研究対象別に集計)した。会員数は500名に達していた。

2 研究内容について

’80年代に入ると、rec. の対象の背後に横たわる条件を明らかにするために因子分析や数量化理論、重回帰分析を試み、数量的に説明しようとする傾向が顕著になり、また、「施設・環境」分野(拙稿、「4」研究会時代を振り返って」表2・参照)の研究では、rec. の環境保全や rec. 資源の有効なスペース・デザインや都市の rec. 空間整備に関する研究の時期を経て、’80年代ではさらにこれらが拡大して景観を計画的に策定していくような研究が顕著になったといえよう。

また、この期以後になると、rec. の意味の拡大とともに、わが国でも漸く週休2日制といったまさにレジャー時代を迎え、経済的豊かさと同相俟って、rec. を行動科学的に解明し、これによって rec. 需要やレジャー・マーケットの方向づけをしようとの意図も強くなり、経済的視点からの分析が目につくようになった。

思うに、これからは数量化がますます進んでくることであろう。数量化は、たしかに、意味づけする際の有力な手段ではあるが、それ以前に、研究者に「rec. とは何か」の認識がなされていなければならない。この認識は至難なことであるだけに、これを補う意味でも先行研究に当ることが望まれる。既研究物のドキュメンテーションが求められるゆえである。さきの「連続シンポ」による成果は、いつに、これを企図したものであった。